新宗連スローガン
信教の自由を守ろう
信仰心を広めよう
宗教協力を進めよう
世界の平和に貢献しよう

新宗教新聞

2018年（平成30年）
9月26日
第1106号

発行所
新日本宗教団体連合会
（略称 新宗連）
〒151-0053
東京都渋谷区代々木５丁目57番10号
電話（03）3468－5551〈代表〉
（03）3468－5588〈編集〉
大阪事務所 〒550-0006
大阪市西区江之子島1丁目８番21号111
電話（06）6443－7178

第3回教化活動懇談会

導いた側・導かれた側 体験発表から学び深める

新宗連

新日本宗教団体連合会（新宗連、岡田光央理事長）は9月12日午後1時から、東京・代々木の新宗連会館で「第3回教化活動懇談会」を開催した。立正佼成会と妙智會教団の4会員が導く側・導かれた側双方の立場から体験発表を行い、グループに分かれての振り返りを通し、それぞれの活動教化に資する学びを深めた。

教化活動懇談会（旧称・教化活動に関する懇談会）は「教化活動の現状と課題」をテーマに、各教団代表者が自らの経験を語り合い、意見を交換する中から、相互に教化活動に資するものを学び合っていくことを趣旨としている。

2016（平成28）年9月30日の第1回懇談会では、妙智會教団九州教会の松枝飛支子教会長が、九州において多くの会員を導いてきた経験について講演。具体的な布教方法や信仰体験などについて話し、活発な意見交換が交わされた。翌17（同29）年9月19日の第2回懇談会では、思親会の飯島法道会長が具体的な導きの体験について講演。教義や経験に基づいた布教活動の在り方や、個別事例について説明し、意見交換では「霊感」の取り扱い方などについても議論が及んだ。

導く人・導かれる人の体験発表を聞く。小山さん（演台左）と長谷川さん（右）

これらを踏まえ、今回は布教の現場、特に導く人（布教する人）・導かれる人（布教される人）の触れ合いや心境の変化、さらに社会生活の中における信仰実践をテーマとした。

新宗連企画委員会の田澤清喜委員長が主催者あいさつ。これまでの懇談会を振り返り、今回のテーマである導いた側・導かれた側双方の話に「一般の方々を導くヒントがある」として、その意義を説明した。

続いて基調発題として立正佼成会の苑田浩世さん、妙智會教団の小山晶子さんと長谷川美恵子さん、立正佼成会の木村浩子さんの4氏が体験発表を行った。

苑田さんは職場の上司が立正佼成会の会員であり、その営業力や人柄に惹かれ会員となったこと、また自身も職場において多くの方を導いてきたことを話した。また、夫婦仲も改善され、生母との再会などを通して「仏さまを信じられるようになった」と披歴。「一人でも多くの方に必ず全ての方が幸せになれる、この教えをお伝えさせていただきたい」と述べた。

小山さんと長谷川さんは、二人で発表。二人は中学時代からの親友であったが、小山さんは妙智會教団の会員であることを長谷川さんには告げていなかった。小山さんは「教団の活動はいいことで、抵抗もなかったが、友達に話すことには抵抗があった」と振り返った。教団行事のため、特定の日に遊べないことを不思議に思った長谷川さんに問い詰められる形で、小川さんは告白。長谷川さんは学校以外にも友達がいることをうらやましく思い、青年部活動に参加する。

長谷川さんは教団の活動を通して教えを学び、本尊を自宅に祀り、両親も会員に導いていくまでになった経緯を語った。長谷川さんは「導くことはその人のことを思うこと。導いてくれた小川さんに感謝しています」と述べた。

木村さんは、父が信仰熱心であったが自分はあまり熱心ではなかったという。たまたま誘われて参加した行事で、自分が嫌いだった人の笑顔が思い浮かんできたり、いるはずのない庭野日敬開祖が微笑んでいるのが見えたりした体験を通して、嫌いな人への悪意が消え、教団活動を熱心に行うようになったと披歴。

その後、看護師として働きながら、ガン患者との宗教を超えた触れ合いや、同僚や知り合いと布教を通して親しくなり、悩みを真摯に聞き、その人に合わせた教えを説き、導いてきた経験を話した。「（導いた方々との）仏縁を宝として、仏さまの慈悲、救われを感じながら、自分の幸せのみならず、他者の幸せのために、いつも喜びと感謝を心に持ち共に歩んでまいりたいと思います」と述べた。

発表を受けグループごとに振り返り

導く側の人柄や人間性、信頼関係築くことが重要

この後、参加者は4グループに分かれ振り返りを行った。その中で「導く側の人柄や人間性が非常に重要」「どの体験も（導いた人の）姿で導いている」「どう信頼関係を築くかが大事」など意見が交わされた。

最後に企画委員会の力久道臣副委員長があいさつ、「（布教は）導く人が神仏を信じきれるかに、懸かっているのではないか」と振り返り、人々を取り巻く状況が変化し続ける中で、「今の時代の信仰心の広め方をこれからも考えていかなければならない」と締めくくった。

セクシャルマイノリティー

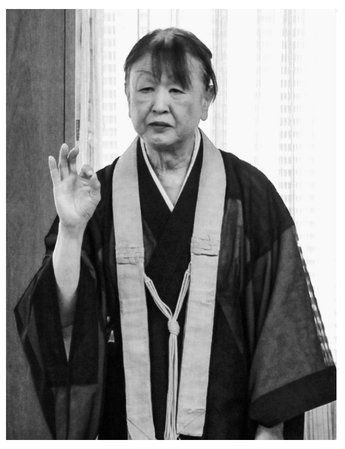
LGBTの人権を考える

新宗連同推協 拡大テーマ研修会

新宗連同和推進連絡協議会（同推協、大滝晃史代表幹事）は9月18日午後1時半から、大阪市西区の立正佼成会大阪普門館で「拡大テーマ研修会」を行った。

今回は、「LGBT―セクシャルマイノリティーの人権問題」をテーマに、高野山真言宗の柴谷宗叔氏を招き、性的少数者が抱えている問題や現状について学んだ。

森田健祐幹事の開会あいさつの後、柴谷氏が講演を行った。柴谷氏は、まずLGBT（「栞」参照）という用語について解説。レズビアン（Lesbian）、ゲイ（Gay）、バイセクシャル（Bisexual）の3つは、「性的志向」を示す言葉である一方、トランスジェンダー（Transgender）は、こころの性とからだの性の不一致を示す言葉であることを説明。LGBTという一般的な分け方自体にも属さない人や、医学的・生物学的に、男女どちらでもない人もいるということを示した上で、「セクシャルマイノリティー」の人権を守ることの大切さを訴えた。


性的マイノリティーの現状について語る柴谷氏

また、日本の男色の歴史に言及し、女人禁制だった高野山に男色が存在したことや、江戸時代には歌舞伎の修行中の少年が売春をする「陰間茶屋」などを説明し、「性の在り方は文化的・社会的規範によって変わる」と語った。

また、ヒンズー教では、ヒジュラーと呼ばれる男性でも女性でもない「第3の性」があり、「国や団体でも、異なる性の規範をすべて認めましょう、というのが本来の姿です」と語った。

柴谷氏は、自身の生い立ちから現在までを語り、小学校低学年の頃から、野球やサッカーなど一般的に男の子が興味を示すものには興味を示さず、ままごとに興味を持っていたが、男の子とも女の子とも遊べなかったので、本ばかりを読んで過ごしていたという。

ある日、母親のワンピースを着てみたところ、母親から驚かれ、母親から相談を受けた父親からは暴行を受け、親には自分の本音を言えなくなり、親から離れるために東京の大学を受験した。

新聞社に就職し、慰安旅行で西国三十三ケ所の青岸渡寺を訪れたことがきっかけで、ご朱印を集めるようになり、四国八十八ケ所を巡礼したり、その他の霊場を巡ったりした。

霊場巡り通して気付き

阪神大震災で被災し、全壊した神戸の自宅の下から見つかったのは、ボロボロになった四国八十八ケ所の納経帳で、そのときに「お大師さまに救っていただいた」と感じたという。

3年の月日が流れ、家が再建できたことのお礼参りに四国を巡った。その際に、白装束は男女の区別がなく差別されない安堵感を感じたり、女性として声をかけられた。四国八十八ケ所を4周することで「先達」となり、現在は119回目の巡礼を行っている。その中で気付いたのは「仏の前では男も女もない」ということ。ある先達仲間から誘いを受け、仕事を続けながら高野山大学の社会人コースに通い、会社を早期退職し、僧侶に。その後、岡山県の大学病院で2010（平成22）年に性別適合手術を受けて、戸籍も男性から女性に変更。高野山でもカミングアウトし、宗務総長の理解もあり、僧籍上も女性に変更することができた。

セクシャルマイノリティーが集い悩みを相談できる場として、大阪府の寝屋川に新しい寺を建立する予定だったが、不思議な縁で守口市に自坊を持つことができた。

日本の人口におけるLGBTの比率は、左利きの人と同じ7％であり、「宗教者は、性的マイノリティーに対する差別の問題に取り組んでいかないといけないし、情報交換をしていくべきだ」と訴えかけた。

滔々抄

ネパールからの朗報に思う

孤児院卒業生が自立、家建て親孝行

久しぶりにネパールから連絡が届いた。

30年数前に縁あって初めてネパールを訪れ、すっかりその国と人々に魅了され、当時は年に数回訪問し都合30数回もネパールと、お釈迦さま生誕のルンビニの大地を踏ませていただいた。しかし、ここしばらくは手紙やメール連絡で済ませ、ご無沙汰していた。

その連絡は、かつて支援していたネパールの孤児院の卒業生からだった。彼の出身はネパール西部の農村。子どもの頃に奇病を発症し故郷では満足な治療も受けられず、首都カトマンズの病院へ運ばれた。しかし、一年間の治療も甲斐なく、残念ながら孤児院へ移された。

そこで両親の迎えを待っていたのだが、一向に兆しなく、両親へ連絡すると〝彼を養う余裕はなく、孤児院で育てて欲しい〟との事だったらしい。

そんな彼と孤児院で出会った。最初の出会いも印象的でハッキリと覚えている。孤児院で子どもたちと交流していると、他の子と同じように無邪気な笑顔で、外国人である私の手を人懐っこくつないできて、片言の英語でお茶目なジョークを交わす姿は、表面的に明るい性格かなと思っていた。

出会って8年後、所用で同国を訪れたところ、たまたま友人宅近くで足を引きずる彼と出会い、二人でチャイを飲んだ。その時に生い立ちや事情を語ってくれたが、その眼に涙は無く、すでに孤児院を卒業し、自立し働いていた。

彼に特別な支援はしなかった。それ以来、年に一、二度の連絡しか交わさなかったのだが、今回の手紙でなんと自分の家をカトマンズに建て、故郷から両親と兄弟4人を呼び寄せ、今一緒に暮らしていると言う。来年の春に故郷から親戚を招待し、パーティーを3日間開くのでぜひ来て欲しいとの招待状だった。

当時、茶屋で何気に交わした「そんなに大変なご両親だからこそ、君が努力して家でも建てて、逆に両親を呼んであげたら…」との無責任な私の言葉を覚えていてくれたのだ。

彼への新築祝いは三越やアマゾンで買うのではなく、何か彼のご両親に手作りのものを準備し、彼の努力に贈る心からの賛辞を用意しようと思う。

合掌

（飯島法道・思親会会長）

西日本豪雨 被災地支援

VOWSボランティア続く

新宗連青年会 WCRP日本委

「平成30年7月豪雨」（西日本豪雨）に際し、新宗連は既報の通り、被災地の支援活動を行っている。

新日本宗教青年会連盟（新宗連青年会、宮口弘道委員長）が世界宗教者平和会議日本委員会（WCRP日本委）と協働するVOWS（バウズ“Volunteers of WCRP&SYL”）は、広島県三原市でのボランティア活動を継続し8月25、26日（第4次）に続き、9月からは「平成28年熊本地震」の際に支援を行った「被災地障害者センターくまもと」（東俊裕事務局長）からの要請により、愛媛県西予市で被災した障害者施設でのボランティアを開始し、農業支援を中心に活動を行っている。

三原市で活動（第4次、8月26日）

三原市では9月15、16日（第7次）、同22、23日（第8次）の土日、4日間で延べ32人のボランティアを派遣（三原市は第5次募集なし。8、9日に派遣予定だった第6次は雨天により中止）。8月に引き続き、加盟教団から参加したボランティアが、被災家屋の土壁はがし、周囲の土砂掻きだし作業などにあたった。

VOWSとしてのボランティア活動は今後、西予市で11月まで継続する予定。

北海道胆振東部地震

道内の加盟教団に大きな被害は無く

9月6日午前3時7分、発生した「北海道胆振（いぶり）東部地震」（北海道地震）。断水や交通機関など復旧しつつあり、厚真町やむかわ町ではボランティア活動が開始されている。

道内に本部を置く加納太霊教院（深川市）と日本神宮本庁（帯広市）、また道内各地に教会・道場・拠点のある立正佼成会、パーフェクト リバティー教団、松緑神道大和山などからは、特に建物など大きな被害は無いとの報告を受けている。道内全域で二日間にわたる停電には、一様に「生活に大きな支障、影響を与えた」との声が聞かれた（25日時点）。

栞（しおり）

LGBT LGBTとは、レズビアン（女性同性愛者）、ゲイ（男性同性愛者）、バイセクシュアル（両性愛者）、トランスジェンダー（性別越境者）の頭文字をとった単語。性の在り方は「身体の性」「心の性（性自認）」「好きになる性（性的指向）」の主に三つに分かれ、ＬＧＢＴ以外にもＸジェンダー（自分の性を男性、女性のどちらかに規定できない／しない）、トランスヴェスタイト／クロスドレッサー（異性の服装を好んで着る）など多様。（１面）

宗教をめぐるさまざまな問題のご相談窓口
宗教もしもし相談室
03 3466-9900
受付●月曜→金曜／正午→午後4時
公益財団法人 新日本宗教団体連合会

緊急出版
平和憲法が平和への道、改憲は戦争への道
―わたしたちが核戦争の加害者とならないために―
カトリック大阪教区神父 西山俊彦
世が平和ボケにあろうとも、「時すでに遅し」と後悔しないために、平和憲法の真価を見直す素養まで捨てるわけにはいかない。
●1400円＋税 四六判並製
248頁 ISBN 978-4-286-19691-6
文芸社
〒160-0022 東京都新宿区新宿1-10-1
☎03-5369-2299 FAX.03-5369-3066
https://www.bungeisha.co.jp
書籍のご注文はお近くの書店またはブックサービス 0120-29-9625、ネット書店まで

ハーベスト社
「世界救世教」に関する初めての本格的研究
療術から宗教へ
世界救世教の教団組織論的研究
隈元正樹著 本体価格3000円＋税
浄霊と称する療術で、第二次世界大戦以後に教勢を伸ばした世界救世教を事例として、呪的宗教の組織化を中心とした教団統合の問題を明らかにする。
近現代日本の宗教変動
実証的宗教社会学の視座から
寺田喜朗・塚田穂高・川又俊則・小島伸之編著 本体価格3800円＋税
西東京市向台町 2-11-5
Fax042-467-8661 Tel042-467-6441

白馬社
合掌ができない子どもたち
浄土真宗本願寺派福賢寺住職 三上章道
四六判 定価1260円
『本願寺新報』の編集長を二十年に亘って務めてきた著者が、合掌ができない子どもたちとの出会いを契機に、戦後の日本社会が戦慄すべき「薄縁社会」となったプロセスを追い、その原因が宗教心の喪失にあることを解き明かす。そして新たに現出した「原発問題」にも、同根の原因があることを洞察していく。日本人の心の問題にするどく迫り、根本的解決への提言をまとめた必読書。
〒612-8469 京都市伏見区中島河原田町28-106
TEL 075(611)7855 FAX 075(603)6752
http://www.hakubasha.co.jp 価格税込

佼成出版社
「宗教者の役割」「信仰の本質」を問う異色の評伝
〈大逆事件〉と禅僧内山愚童の抵抗
眞田芳憲
四六判／240頁
本体2000円＋税
日本近代史における最大の思想弾圧「大逆事件」に連座し、刑死した禅僧・内山愚童（1874～1911年）。社会主義者、無政府主義者としてこれまで語られがちであった愚童の思想と行動を、本書は仏教者としての側面から仔細に検証。その知られざる実像を明らかにする。
〒166-8535 東京都杉並区和田2-7-1
☎03(5385)2323 FAX03(5385)2334
http://www.kosei-shuppan.co.jp/

南雲堂
美容と健康寿命の秘策！
認知症予防★お口の体操
『みんな笑顔、みんな元気！』DVD
定価（本体2000円＋税）
監修・作詞：太田哲二 作曲：森重恭典／歌・実演：恵中瞳
（体操解説・歌詞収録のブックレット付）
●収録内容（歌と体操の実演）
▣アッカンベー体操／舌の動きや首を回して、筋肉を活性化させて、リンパの流れを良くする。 ▣パタカラ体操／魔法の言葉『パ・タ・カ・ラ』を使って口を大きく動かして脳に刺激を与え、認知症予防！ ▣ラップ・ラップ体操／早口言葉や落語の寿限無をラップのメロディにのせて歌うことで手・眼・口・全身の運動機能を向上させる。
〒162-0801 東京都新宿区山吹町 361
☎ 03-3268-2311 FAX 03-3260-5425
http://www.nanun-do.co.jp/

芸術生活社
【芸生文庫】
高齢期を快く生きるための〝人生の道しるべ〟
老春謳歌（ろうしゅんおうか）
長生きの秘訣
御木徳近著
パーフェクト リバティー教団第二代教祖が、宗教家としての悟りと長い人生経験、多くの人との出会いから、高齢期を心豊かに暮らすための新しい生き方を提唱する。
■定価700円（税込）
〒150-0047東京都渋谷区神山町16-1
電話03-3469-1153 FAX03-3465-6867

清文社
宗教法人の税務調査対応ハンドブック
〔宗教法人税制と法制の解説を含めて〕
石村耕治 編
A5判3780円
平成25年からの新・税務調査手続にも対応！
宗教法人と税務調査についての基礎知識を中心に整理し、コンパクトに解説した、実務家・宗教関係者必携の一冊。
公益財団法人 日本宗教連盟推薦！
〒101-0047 千代田区内神田1-6-6
☎03(6273)7946 FAX03(3518)0299
http://www.skattsei.co.jp〈価格税込〉

解脱会伝記編纂委員会編
新版 解脱金剛伝 全3巻
A5判 上製函装 定価3000円（税込み）
世相善導、人心救済への道筋を説かれた解脱会会祖・解脱金剛（岡野聖憲）の生涯を全1549頁、3巻に収めた。会祖亡き後、その人格に触れて自らの内に深い帰依心を培い、世のため人のために生きるための学びの土台となる書。第1巻＝生誕から事業の失敗、大成を経て宗教の世界に目覚めていく前半生を描く。第2巻＝昭和4年に立教して以来、人心救済の道一筋に生き、教えの土台を完成するまでの事績を辿る。第3巻＝戦時下の厳しい時代の中で縦横無尽に教えを説き、救済活動を展開し、遷化されるまでの歩みを記す。
解脱会
〒160-0007 東京都新宿区荒木町４番地
Tel 03-3353-2191(代表) Fax 03-3353-3055

新宗連
青年会

結成40周年記念 ピースフォーラム
歴史振り返り平和へ向け行動を

青道連

新日本宗教青年会北海道連盟（青道連、川口玄徳副委員長、門脇靖夫副委員長）は9月2日午前11時45分から、北海道札幌市の立正佼成会札幌教会で北海道連盟結成40周年記念「ピースフォーラム」を開催した。

世界平和の招来を願って、黙祷した後、教団別礼拝に移り、松緑神道大和山と善隣教、パーフェクトリバティー教団（PL）、立正佼成会の順に各教団の礼拝形式に従い、礼拝を行った。続いて、川口玄徳青道連副委員長が開会あいさつに立ち、北海道総支部の石井忠義会長が祝辞を述べた。

記念写真を撮影し、2F研修室で昼食。この後、「新宗連青年会の原点を振り返る」をテーマにDVD「新宗連青年会50年のあゆみ―世界平和への道・共に手をたずえて前進しよう」を視聴し、結成から2011（平成23）年までの歴史を振り返り、橋本浩志新日本宗教青年会連盟（新宗連青年会）事務局長が12（同24）年以降の活動を補足説明した。

続いて、宮口弘道新宗連青年会委員長が登壇し、「結成の原点～今も続くつながりと喜び」をテーマに基調講演を行った。宮口委員長は、新宗連青年会の2大行事である「戦争犠牲者慰霊並びに平和祈願式典（8・14式典）」と「ユースフォーラム」、西日本豪雨で被災した広島県三原市でのボランティア活動を紹介し、祈るだけでなく、心を込めて活動をすることの大切さを語った。

また、世界平和のために、家庭での生活を「調（ととの）える」ことの重要性を語り、「家庭をパワースポットにして下さい」と呼びかけた。そして、足元の実践の積み重ねが世界平和に繋がっていくことを説明した上で、「信仰のあふれる連盟にしてください」と語った。

この後、「2020みんなで一緒にできること～世界平和に向けてのアクションプラン」というテーマで4グループに分かれてディスカッションを行い、模造紙に行動計画をまとめ、全体発表。北海道総支部の熊谷典昭事務局長が総評を行った後、閉式のあいさつを門脇靖夫青道連副委員長が行った。

新日本宗教青年会 北海道連盟
結成40周年記念『ピースフォ
絆 ～チーム北極星～
新日本宗教青年会北海道連盟
基調講演で宮口委員長は心を込め活動する大切さを語る

第37回原爆犠牲者慰霊並びに平和祈願式典執り行う

青中国連
広島県委員会

新日本宗教青年会中国連盟（青中国連）広島県委員会（石橋政詞委員長）は8月25日午後5時から、広島市の広島平和記念公園の原爆供養塔前で「第37回原爆犠牲者慰霊並びに平和祈願式典」を執り行った。

はじめに石橋政詞委員長と、同式典に「平成30年度中国連盟平和学習会」として参加した松本晃司郎前青中国連委員長が開会あいさつ。石橋委員長は参列者に謝辞を述べた後、当初8月4日に同式典を行う予定だったが、豪雨のために順延になった経緯を説明した上で、「平和を祈る心は一つです。平和を求める心を深める日にしましょう」と呼びかけた。また松本前委員長は「原爆の恐ろしさを人に伝えるのが大事です」と語った。続いて石橋委員長と松本前委員長が献花を、立正佼成会萩教会の原千陽氏が千羽鶴を奉納した。

この後、NPO法人・ヒロシマ宗教協力平和センター（HRCP）に所属する蜂須賀智子さん（86）が被爆体験の講話を行い、原爆投下時のことを語った。

被爆体験を語る蜂須賀さん

蜂須賀さんは当時13歳で動員学徒として軍需工場で働いているときに被爆。爆風の衝撃で建物の下敷きになり、胴体が挟まれてしまったが、両足を動かし、何度も助けを呼ぶと、見知らぬ誰かが両足を掴んで引きずり出してくれ、そのお陰で一命を取り留めた。突然のことで一体何が起こったか分からなかったが、助かった直後に見た光景は、見渡す限りの瓦礫と、本来なら見えるはずのない広島駅だったという。

至るところから火柱が上がり、燃え盛る市内を「どうか助かって、お母ちゃん」との思いで、両親の安否を確かめるため、実家に向かった。死体をよけながら歩き、川上から流れてくる死体や、原爆で炭化した人間を横目で見つつ、やっとのことでたどり着いた実家は「なんの音もせず、死の世界に感じて、その場所には居られませんでした」と語った。

父は無事だったが、母は大やけどを負い、その看病をする中で8月15日、玉音放送を聴き、戦争が終わったことを知った。灯火管制のために電球のカサに被せていた黒い布を外した時、白熱電球の光が眼に飛び込んできた。その時、「やっと戦争が終わった」という安堵感と平和の尊さを感じるとともに、その光から原爆の閃光を連想し、「原爆の悲惨さをあらためて思い出しました」と語った。

3学期が始まり、すぐに先生から呼び出されて伝えられたのは、自分以外のクラスメイトは全員死んだという辛い現実だった。自分だけが生き残った事実を受け入れられず、申し訳ない思いや、後ろめたさを感じ、クラスメイト全員を原爆で亡くした悲しみを口に出すことが出来なかった。

しかし、他の被爆体験者が赤裸々に体験を語っているのを聴くうちに、徐々に亡くなった友達が見守ってくれているような気持ちが芽生え、2002（平成14）年から被爆体験の証言を行うようになった。

蜂須賀さんは未来を担う人たちには、今日のような平和な日本になるまでには数え切れない犠牲があったことを知り、一人ひとりが平和のためにできることを行い、「かけがえのない平和を守り続けてほしい」と呼びかけた。

この後、「教団別慰霊供養」をPL、立正佼成会、解脱会、松緑神道大和山、善隣教の順に行った後、全員で黙祷し平和の祈りを捧げた。さらに「誓いの言葉」を唱和し、原爆の悲惨さを語り継ぎ、核兵器廃絶と世界平和のために、身近なところから実践することを誓った。広島県委員会の武政有希子副委員長があいさつに立ち、閉式した。

終了後、参加者からは「あらためて戦争の悲惨さや怖さを学び、同じ過ちを繰り返してはならないと深く心に刻むことが出来ました」との感想が語られた。

新宗連・平和学習会―
憲法改正と国民投票
講演内容と意義を振り返る
新宗連の精神、国民投票の問題学ぶ

新宗連が全国の総支部・協議会で開催している「憲法改正と国民投票」をテーマとする平和学習会。最近開催した2協議会を取り上げ、あらためてその内容と意義について振り返っておきたい。

京都府協議会

京都府協議会（佐藤益弘議長）は9月3日午後3時から、京都市の立正佼成会京都普門館で山田匡男新宗連総局長を講師に開催。

山田総局長は新宗連の設立の精神には「信教の自由」を守ることと、「二度と戦争を起こさないこと」があると解説。「信教の自由」は、基本的人権の根幹をなし、宗教を信じない自由も認めていることから、「すべての人にとって大事な権利」と述べた。また、「戦争は始める時はすべて聖戦ですが、新宗連の立場は『絶対非戦』」と語り、この二つの精神に基づくことが新宗連の憲法観であることを解説した。

新宗連京都府協議会
平和学習会
テーマ『憲法改正と国民投票』
山田総局長が新宗連の憲法観、国民投票の問題点などを解説（9月3日　京都府協）

続いて、国民投票について解説。衆参両議院で憲法改正の発議がされれば、60日から180日以内に国民投票が行われること、国民投票は衆参院議員を選ぶ選挙とは異なり、個別訪問や投票依頼を目的とする署名活動など、ほとんど規制されていないこと、投票日15日以前はテレビCMの規制もなく、賛否どちらかに投票を促す「勧誘行動」も可能であり、広告資金の規制もないので、資金のある方が有利になってしまうことなどを解説した。

そして、「国民投票」というものの、「国民の半数が投票していない場合でも、改憲が決まってしまう」と現行制度の問題点を指摘。現行制度では、最低投票率は定められておらず、実際に投票した人の2分の1以上の賛成で可決されることになり、「投票率が著しく低ければ、国民の少数で憲法が改正されてしまう」と警鐘を鳴らした。

宮城県協議会

宮城県協議会（佐藤重忠議長）は9月3日午後1時から、宮城県仙台市の立正佼成会仙台教会で佐原透修新宗連事務局長を講師に開催。

佐原事務局長は、はじめに現在議論の高まっている憲法改正が今後の時代を左右すると述べ、「子や孫の世代に責められないようにしっかりと考え、決断することが迫られている」と指摘し、憲法改正に真摯に向き合い、国民投票を行うことの重要性を訴えた。

国民投票法の問題点の指摘、新宗連の歴史や精神について説明した後、国民投票にあたって前提とするべき知識として、①憲法は文言が全て②後法は前法に優先する―を示した。①については、憲法の文言が変更されるということには、些細な文章の変更でも、それ相応の意味があり、変更の意図を汲み取る必要があることと説明した。

②については、後からできた憲法条文が前からあった条文と矛盾する場合、後からできた条文が優先されると説明。例えば第9条（戦争の放棄）改正について、安倍晋三首相は9条を現状のまま残し、「9条の2」を追加することを提案しているが、もしも9条の2（後法）が現行9条（前法）と矛盾する場合、9条の2（後法）が優先されるので「現行の9条は実質上廃止される」と、憲法を追記することの意味について指摘。

改憲の賛否は個々人が考えることではあるが、これらの憲法の仕組みを踏まえ、「複数のメディアを見て考える習慣をつけてほしい」と述べ、国民投票に向かう心構えを説いた。

8協議会で開催

8月27日から9月25日までに平和学習会を開催したのは8協議会。上記2協議会以外に、旭川地区協議会（2日、旭川市、講師＝佐原透修事務局長）、三重県協議会（13日、津市、講師＝佐原事務局長）、栃木県協議会（16日、宇都宮市、講師＝種田和敏弁護士、佐原事務局長）、香川県協議会（同日、丸亀市、講師＝梶山貴史新宗連大阪事務所主任）、岡山県協議会（22日、岡山市、講師＝佐原事務局長）、北九州地区協議会（23日、北九州市、講師＝佐原事務局長）が開催した。

自民党総裁選で改憲を強く訴える安倍首相の三選が決まった。本格化することが予想される改憲議論、現実味を帯びる国民投票に向け、新宗連では今後も各地域で学習会を展開していく。

新宗連
総支部
協議会

終戦後に発生した三船遭難犠牲者悼み慰霊祭

北海道

北海道総支部（石井忠義会長）は8月29日午後2時から、北海道留萌郡小平町鬼鹿海岸の三船遭難慰霊之碑前で「三船遭難犠牲者合同慰霊祭」を執り行った。

「三船遭難事件」は、1945（昭和20）年8月15日の終戦から1週間後の22日に北海道留萌沖で発生した。樺太からの引揚者5082人を乗せた泰東丸と第二新興丸、小笠原丸の3隻の引揚船が国籍不明の潜水艦の攻撃を受け2隻が沈没し、1708人もの人々が犠牲となった。

慰霊碑前に参列し慰霊祭を執行

現在も事件の真相は解明されておらず、政府から犠牲者への補償も行われていない。関係者が年々少なくなり記憶が薄れる中で同慰霊祭は、事件の風化を防ぐと共に、犠牲者を悼み慰霊するものとして今回、総支部主催で行われた。

午後2時に開式し、平和の祈りを行った後、岩壁宏至副会長のあいさつに続き、加納大霊教院と円応教、松緑神道大和山、PL、立正佼成会の順に教団別礼拝を行った。

この後、参列者がそれぞれ献花を行い、石井忠義会長があいさつを行い、閉式した。

北海道総支部では同慰霊祭のために、事前学習を行い、DVD映像などで同事件の内容を学んだ。

松緑神道大和山 主催―
東京都慰霊堂
慰霊祭に初の参列

東京

東京都協議会（髙橋秀明議長）は9月16日午後1時から、東京都墨田区の東京都慰霊堂で松緑神道大和山東京教区（岡田茂教区長）が主催する「第9回東京都慰霊堂―萬霊鎮魂慰霊祭」に参列した。

同慰霊祭は、東京教区の壮年部が田澤康三郎初代教主の足跡を辿る中で、初代教主の東京都慰霊堂参拝を確認したことから、2003（平成15）年に始まった。壮年部から東京教区の主催となり、一時、関東全体の行事ともなったが、昨年より東京教区主催行事となっている。新宗連東京都協議会が参列するのは初めてのこと。

定森布教部長による祝詞奉上

開式の後、修祓、「招神の儀」、献饌、聖歌「祈りの歌（一）」奉唱の後、祭司を務める松緑神道大和山本部の定森仁風布教部長が、祝詞を奏上した。

祭司が玉串を奉奠した後、岡田茂教区長、東京都協議会を代表して髙橋秀明議長、信者代表らが玉串奉奠を行った。

閉式の後、東京大空襲の語り部の関野清雪氏が登壇。1945（昭和20）年3月9日、関野氏が小学校5年生の頃に体験した東京大空襲について、「外が真っ赤になっていた」「焼夷弾が雨のように降っていた」と述懐。防空壕に逃げ込んだが、入っていられないほどの熱風が吹きこみ、川辺へと向かった関野氏は、土手に穴を掘ってそこに顔を突っ込み、空気を確保するなどして、生き延びたという。

空襲後、川の水が見えないほど人間が浮いていたこと、堤防の手前の原っぱにも死体が多く倒れていたこと、遺体を運ぶ手伝いをしたことなどの壮絶な体験を話し、その後も体験したことが「頭の隅から離れない」日々を送ってきたという。

近年になり、憲法第9条改正の問題が出てきたことを契機に、「戦争をやってはいけない」ということを伝えるために語り部を始めたとの思いも披歴した。

この後、定森布教部長が法話。戦争を知らない世代が増えているが、「戦争は平和、人の幸せに結びつかないことを多くの人に伝えていかなければならない」と述べた。

また、新宗連青年会が主催する「8・14式典」を取り上げ、同式典で「絶対非戦」を掲げていることに触れ、「一人ひとりが争わないことを信条としていかなければ、社会の平和も実現しない」と訴えた。

そして、争いの原因には怒りがあるとして、相手の態度や言葉に怒りを覚えるべきではなく、「自分の心が未熟だと反省すべき」と説き、「まずは自分の心を見つめ直すことが信仰の第一歩であり、平和への第一歩」と述べた。

さらに、戦争犠牲者など、日々の暮らしが多くの人の足跡の上にあると述べ、「多くの亡き御霊は後世の幸せ、平和を望んでいる」と説き、「身近なところに平和の種を、幸せの種を撒いていきましょう」と呼びかけた。岡田教区長が謝辞を述べた後、参列者が順に焼香を行い終了した。

防災施設・首都圏外郭放水路を見学

東京都協環境推進委

東京都協議会の環境推進委員会（千葉和男座長）は8月31日午前10時半から、平成30年度の環境施設見学会を開催し、埼玉県春日部市の「首都圏外郭放水路」を訪問した。

同施設は、国土交通省関東地方整備局が管理する国の大規模防災施設で、今年8月から民間の事業者が見学会を運営し、官民連携により世界的な「防災インフラ観光施設」に育てる社会実験が始まったばかり。当日は平日にもかかわらず、同委員会以外からも多くの参加者が見学会に参加していた。

一行は事務所兼広報施設「龍Q館」で、展示室や操作室を見学した後、「コンシェルジュ」から首都圏外郭放水路の概要説明を聞いた。同放水路は大雨時、中川、倉松川、大落古（おおおとしふる）利根川などの中小河川から、アメリカの自由の女神像がすっぽり入る内径約30㍍、深さ約70㍍の、5つの立坑に水を取り込み、地底50㍍、全長6・3㌔の地下河川を通して、江戸川に流すというもの。

説明の後、各立坑の水を貯めて放水するための巨大プールで、「地下神殿」と称される「超圧水槽」をコンシェルジュの案内で見学。約100段の階段を下りると、外の暑さが嘘のようにひんやりとして、湿気を含んだ淡いもやの中に水銀灯の薄明かりに照らし出された地下神殿が幻想的な姿を現した。続いて第1立坑を上から覗くなど施設の仕組みを学んだ。

ポンプ停止水位
▽AP−6.187
巨大プール「地下神殿」を見学

終了後、千葉和男座長があいさつ。「ちょうど西日本豪雨災害があり、こちらでは新たな見学会が始まったばかりのところで、水害に対する備えを学ぶいい機会となった」と述べ、「首都圏に住み、会員信徒を預かる私たちにとっても他人事ではないため、引き続き災害に対する学びや啓発を行っていきたい」と結んだ。

〝吹奏楽の甲子園〟にお別れ

―立正佼成会―

普門館解体前に開放イベント 11月

立正佼成会（庭野日鑛会長）は今年12月からの取り壊しが決まっている、東京都杉並区の本部施設・普門館を11月5日から1週間、一般に開放するイベントを開催する。

普門館は1970（昭和45）年4月に落成し、教団行事ほか国内外のアーティストによるコンサートなどに利用されてきた。特に全日本吹奏楽コンクール（高校の部）は〝吹奏楽の甲子園〟と称され、吹奏楽部の高校生らの憧れの聖地となっていた。

しかし落成から40年余が経ち、2012（平成24）年の耐震調査の結果、大ホールの使用停止をやむなく決定。改修や新会館の建設を断念し、今年12月から解体工事が始まる。

今回のイベントはこれまで普門館を利用した外部の人々、特に普門館で演奏することを目指してきた吹奏楽関係者らに舞台を開放し、大ホールの見学や写真撮影、楽器を持ち込んでの音出しなど、思い思いに時間を過ごしてもらおうとの企図。

40年余にわたり、様々なコンサートに利用された普門館

イベントの名称は「普門館からありがとう～吹奏楽の響きたちへ」。これまで特別な思いで利用した人々へ、普門館から感謝の気持ちを伝える場とする。

実施日時は①11月5～9日（18時開館、21時閉館）②11月10日（14時開館、21時閉館）③11月11日（10時開館、18時閉館）―の3回。詳細は同イベント特設ページhttp://www.kosei-kai.or.jp/fumonkan/

大和山チャリティーバザーが開幕

実践の輪を広げ世界平和へ

平和一食運動提唱から45年― 東北、北海道の13会場で開催

松緑神道大和山

松緑神道大和山（本部＝青森県平内町、田澤清喜教主）が、世界平和への実践活動として毎年秋に実施している「大和山チャリティーバザー」が、9月9日の青森県五所川原市での開催で幕を開けた。

バザーは、田澤康三郎初代教主が1974（昭和49）年、ベルギー・ルーベンでの第2回世界宗者平和会議（WCRPⅡ）において、「平和は議論のみでは実現しない」と実践活動の必要性を確信したことが発端。帰国後、「いつでも・どこでも・だれでもいつまでも」をスローガンとした「一食（いちじき）を捧げ―一欲を節する運動（平和一食運動）」を提唱した。さらなる実践活動として翌年9月、第1回チャリティーバザーが五所川原市で開催された。その後、北海道や宮城県などに広がり、東北、北海道で催されるようになり、チャリティーイベントとして地元に定着したものとなっている。

バザーに寄せられた浄財は、国際連合世界食糧計画（WFP）や認定NPO法人テラ・ルネッサンスなどの団体を通して世界平和活動に役立てられている。

9日、五所川原会場でのバザーは、今年も「オルテンシア」（五所川原市ふるさと交流圏民センター）前広場で催された。

雨天にもかかわらず、開会式の午前8時半には、多くの市民が会場を埋めた。開会にあたり、鈴木武幸代表総務があいさつ。今年、教団が立教百年の奉祝の年を迎えたことを報告すると共に、初代教主の平和一食運動の提唱から45年にわたり、教団が世界平和に向けさまざまな実践活動を企画運営し、バザーも地元の協力・理解を得ながら推進されてきたことを説明。今日では青森県、北海道、岩手県、宮城県の13会場で開催し、五所川原では44年間毎年催され、バザーを通し、継続の大切さや多くの人々とのご縁、お互いの理解、支え合う喜びなど、多くの学びを重ねてきたことを挙げた。そして「この実践の輪を一人でも多く広げ、大きな輪としていくことが世界平和につながると信じております」とあらためてバザーの意義を語った。

続いて来賓の三村申吾青森県知事と佐々木孝昌五所川原市長のあいさつ、五所川原市社会福祉協議会への寄付金贈呈、出店にあたるWFPとテラ・ルネッサンスのスタッフらが紹介された後、聖歌「世界平和祈願日の歌」を斉唱した。

午前9時、販売開始を告げる花火が打ち上げられると、市民らは一斉に目当ての食料品や海産物などの出店テントに詰めかけ、人気の玉ねぎや大根などの野菜テントには行列ができ、販売開始後30分ほどで売り切れ。また、会場内にはそばやうどんなどのチャリティーレストランも設営され、終日賑わいをみせた。

チャリティーバザーは五所川原会場の後、土日祝日に合わせ、9月は青森市、宮城県松島町、札幌市と続き、10月は北海道を中心に、11月4日の宮城県松山町まで12会場で開催され、最後に教団本部で開催される。

人気の玉ねぎや大根などは30分ほどで売り切れた（9日）

黄金の絆を深め、協力を

第21回日中韓仏教友好交流会議日本大会

日中韓国際仏教交流協議会（会長＝伊藤唯眞浄土門主・総本山知恩院門跡）は9月12日午前10時から、兵庫県神戸市の立正佼成会神戸教会で「現代に生かす仏教の慈悲心～三国仏教の役割」をメーンテーマに「第21回日中韓仏教友好交流会議日本大会」を開催し、三カ国の仏教者ら約300人が参加した。

同会議は1993（平成5）年9月、京都で開かれた日中友好仏教協会の創立40周年記念大会の席上、中国佛教協会の趙樸初会長が「三国仏教界に黄金の絆を構築しよう」と提案したことがきっかけ。

同会議の実現に向けて、中国佛教協会と韓国仏教宗団協議会、日中韓国際仏教交流協議会が主体となって取り組み、第1回大会を95（同7）年に北京で開催し、第2回をソウルで、第3回を京都・奈良で開催して以来、中国・韓国・日本の順で毎年行われ、今回が日本にとって7回目の開催となった。

伊藤唯眞会長は開会あいさつの冒頭で「第21回の開催を迎えられたことを大変嬉しく思う」と述べ、日本に仏教が中国、韓国の両国から伝えられたことに触れ、「日本の仏教者は常にこの事を自覚し、永世に平和を願う国民として『黄金の絆』を再構築し、揺るぎないものとしなければならない」とした。その上で「世界人類の不易の共存共栄、即ち仏陀の説く『和合と共生（ともいき）』の理想社会の建設に邁進しなければならない」と訴えた。

合議書に調印した後、手を合わせる3カ国の代表者

世界平和祈願法要に移り、日本・中国・韓国の順で、それぞれの様式で法要を行い、表白文、世界平和祈願文を奏上した。

この後、記念撮影、お茶会が催され、併せて長唄演奏及び日本舞踊などが披露された。

昼食をはさんで、午後2時から日中韓それぞれが基調発言と、その補充発言をする形式で、三国仏教講演会が行われた。日本からは日中韓国際仏教交流協議会理事長の武覚超氏が登壇し基調発言。

武氏は物質的に豊かになった現在であっても、世界各地では紛争やテロが頻発していること、また精神面において利己主義の蔓延により心の病や、犯罪が絶えない事を憂い、「混迷の現代社会においての問題解決に求められるのは、仏教の慈悲心ではないか」と述べた。

慈悲について、大乗八宗の祖師といわれる龍樹の言葉を引き、「龍樹の『大智度論』によると『慈』は衆生に楽しみを与えることで、『悲』は衆生の苦しみを取り去ることで、慈悲こそが仏教の根本であると示されている」と説明。さらに伝教大師最澄の「道心」に触れ、「自己の利益のためでなく、他者、社会、世界のために心遣いする態度の重要性を示している」とし、「これこそが人間らしい思いやりの心を取り戻す基本となるべき理論だ」と述べた。

基調発言の結びとして「忘己利他の慈悲心、つまり『道心』の涵養と実践こそが現代に課せられた課題。三国仏教徒はこの課題に率先して取り組むべきだ」と力強く訴えた。

補充発言として、立正佼成会神戸教会の福井千代子氏が登壇。福井氏は阪神淡路大震災で被災し、娘を亡くした当時の思いを、「娘を助けられなかったことを責め続けてきた」「神も仏もあるものかと信仰を受け入れられず、仲間の被災者に寄りそう事ができなかった。この苦しみから一生抜けられないと思った」と切々と述べた。

しかし、周りの暖かい援助や寄り添い、教えのおかげで徐々に頑な心が癒されたと変化があったことを話し、「不都合な現象を通して、他者を思いやり、寄りそうことの大切さに気付かせてもらった」と、信仰のありがたさを述べた。

3カ国の仏教者ら約300人が参加した

中国、韓国の基調発言、補充発言の後、武氏が共同宣言文を発表。多様化している世界は「依然として混沌とし、世界平和への道のりはまだ果たされていない。そのような世界の中で仏教の有する慈悲心の重要性や、それを基とした仏教徒の果たすべき役割は増す一方である」とさらなる努力の必要性を述べた。そして「三国仏教徒が黄金の絆を深め、互いに協力し、仏法の慈悲心を基に現代社会に則した形で人心に寄り添い、世界平和と人々の安寧のために、より一層努めていくことを誓い合い、ここに宣言する」と力強く述べた。

最後に、3カ国の代表者が登壇し、合議書に調印した。

合祀者の遺徳に感謝

悠久世界平和への道を

教祖ご昇天35年祭
第33回合祀敬霊祭

修養団捧誠会

修養団捧誠会（本部＝東京・池袋、出居徳久総裁）は8月26日正午から、静岡県沼津市の悠久世界平和郷で「教祖ご昇天35年祭並びに第33回合祀敬霊祭」を執り行った。

出居総裁が祭壇前で「教祖礼拝の詞」を奏上

開式に先立ち、出居徳久総裁が万霊万物尊愛堂で「いのりのことば」を奏上した後、御霊所へ移動。木島正孝事務局長と早山徹会長の先導を受け、出居清太郎教祖と出居菊の会母座像前の祭典会場に着座した。7月の西日本豪雨犠牲者に哀悼の意を表して全員で黙祷した。

開式後、出居総裁が祭壇前に進み、「教祖礼拝の詞」を奏上。続いて出居総裁、早山会長をはじめ代表者の玉串奉奠が続いた。この後、1982（昭和57）年4月8日の「教祖おことば」を拝聴し、「教祖讃歌」を全員で奉唱した。

早山会長による式辞の後、「合祀の儀」に移り、小松秀憲教学院長が、今年、敬霊塔に新たに合祀される物故者名を読み上げ、合祀者の遺族らが順次献花を行った。木島事務局長の先導により芳名箱を奉持した斎員が敬霊塔へ移動し、塔内に納めた後、出居総裁が敬霊塔前に進み、「いのりのことば」を奏上。参列者も敬霊塔に向かい、総裁の祈りに合わせて礼拝した。

合祀申込者を代表して、木島一郎元会長の妻、良子氏があいさつ。電報披露の後、出居総裁が挨拶に立った。先達をはじめとする多くの遺徳と一人ひとりの真心の奉仕に謝意を表し、「本日は大極からの無限の光をいただき、奇跡のごとき霊峰富士を拝して、式典が挙行できましたことに感謝申し上げます」と述べ、新たな合祀者の遺徳に感謝の言葉を捧げ、「魂の旅は悠久、私たちは今日より心新たにして、万霊万物尊愛の心で、悠久世界平和への道を共に歩ませていただきたい」と結んだ。

「御神文」で教え示す

心を素直に我欲捨て

平成30年度例大祭

日本神宮本庁

日本神宮本庁（中島秀典管長）は9月14、15日に、北海道帯広市の本宮・帯廣明神大社で「平成30年度例大祭」を斎行した。

14日午後6時から宵宮祭が執り行われ、15日は午前11時から本祭典が斎行された。本祭典は拝殿に参列者が着席した後、太鼓が打ち鳴らされ、祭員によって開式が告げられ、修祓、開扉の儀が厳かに行われた。

斎主の中島秀典管長が神前に進み、「大祭祝詞」を奏上した。続いて斎主が「日本神宮御神文」を奉読。病気や災難、貧苦から逃れるため、心を素直に我欲や恨みの心を捨て、すべてに感謝し譲り合い、人に尽くす真心が善因善果、一家繁盛につながるなどの神文を朗々と読み上げ、参列者らは頭（こうべ）を垂れ拝聴した。

この後、斎主が玉串を奉奠した後、役員と来賓、参列者ら一人ひとりが神前に進み玉串を奉げた。

小憩の後、祭典直会では、中島管長があいさつ。6日に発生した北海道胆振東部地震では全道が二日間、停電したことに触れ、「自然の恐ろしさ、当たり前のように考えていた文明はもろいものであることを再確認されたと思う」と説いた。

また、神道における直会の意味を述べるとともに、直会で振る舞われる秋鮭鍋や枝豆、漬物などは信徒から奉納されたものを、真心を込め調理したもので、例大祭で50年来、続けられていることを説明した。

奉納芸能ではマンドリンや日舞、よさこいソーラン、カラオケなどが続き賑わいをみせた。

中島管長（中央）が「御神文」を奉読

心願成就を願い火渡り

大護摩祭を斎行

大三輪教

大三輪教（迫泓管長）は8月26日午後1時から、奈良県桜井市の本部・本院で「大護摩祭」を斎行した。

太鼓がなる中、迫吉晴斎主をはじめ斎員が本部神前に入座。修祓の後、斎主が「開式之詞」を奏上。参列者全員で「大祓之詞」を奏上した。そして斎主、各団体代表者、一般参列者の順で「玉串奉奠」を行った。

この後、斎主と3人の斎員らが、境内中央に設けた護摩壇前へ移動し、斎員らが「大護摩祝詞」を奏上。2人の斎員が本院神前の灯明から竹の先に採火し、護摩壇に点火した。

白衣を纏（まと）った斎員らが「病気平癒」「家内安全」「交通安全」等の祈願が書かれた護摩木を手に、一本一本に九字を切り、護摩壇の燃え盛る炎の中に投入した。参列者はこの護摩壇を囲み、残暑が厳しい中にもかかわらず一心に「般若心経」を唱えた。

護摩木が燃え尽きた後、「火渡りの行」へ移った。護摩壇を解き、塩で清め、護摩木の炭を広げ、檜の青葉を敷いた。白煙が立ち昇るその上を、信者は一人ひとり合掌しながら心願成就を願い裸足で歩ききった。

裸足で「火渡りの行」を行う信者

ひとりで悩まず電話して！
ホントにつらい時って誰にもいえない…よね。

●必要に応じて面接をしています。
●手紙でのご相談にも応じています。
●秘密は守られます。
●相談は無料です（通話料はかかります）。
●金銭的な援助はできません。
●医療・法律・教育関係の助言や指導は、
専門家にお願いします。
●特定の思想・宗教・政党などとは一切関係ありません。

●東京自殺防止センターは国際ビフレンダーズの一員です。
●私たちは国際ビフレンダーズ憲章に沿って活動しています。

NPO法人　国際ビフレンダーズ
東京自殺防止センター
03-5286-9090
年中無休、夜8時から翌朝6時まで
火曜のみ午後5時から翌朝6時まで
〒169-0072　東京都新宿区大久保3-10-1 日本基督教団シロアム教会内
事務局電話番号　03-3207-5040（FAX 03-3207-5098）

●全国にある他の自殺防止センター
国際ビフレンダーズ 大阪自殺防止センター
06-6260-4343　毎週金曜、午後1時から日曜、午後10時まで
国際ビフレンダーズ 宮崎自殺防止センター
0985-77-9090　毎週日曜・月曜・水曜・金曜、午後8時から午後11時まで
国際ビフレンダーズ 岩手自殺防止センター
019-621-9090　毎週土曜、午後8時から午前0時まで
国際ビフレンダーズ あいち自殺防止センター
052-870-9090　毎週金曜、午後 8 時から11時まで

―自殺者数は19歳以下増加・20代微減―

悩める若い世代に対応を

東京自殺防止センター　特別電話相談を終えて

SNSも活用 まずは信頼できる人に

日本の自殺者数は2010（平成22）から年間3万人を下回り、年々減少しつつある。その一方で自殺者数は19歳以下増加・20代微減の傾向にあり、楽観視できない状況がある。20年間にわたり自殺防止・啓発活動を展開している特定非営利活動法人・東京自殺防止センター（森啓一理事長、中山町子ディレクター）は夏休み明けにあたる9月初め、3日間にわたる連続の特別電話相談を実施した。自殺防止の現場から、悩める若い世代の置かれた状況、対応を探ってみる。

東京自殺防止センターが今回実施した特別電話相談は、9月1日正午から3日午前6時まで三日間にわたり連続54時間、電話相談にあたるもので、6年前から開始した。厚生労働省が定める9月10～16日までの「自殺予防週間」に先立つ企画。フリーダイヤルで今回のコール数は約1500件中、親身に相談にあたることができたのは200件余。そのうち10代は10％を超えるという。

悩み苦しむ人の話を傾聴する
（センターの電話相談ブース）

自殺防止センター広報委員長の美濃部豊樹氏は「6年前に比べると、10代の相談は体感として増えていると感じる」と語る。

警視庁自殺統計原票データから厚生労働省が作成した「年齢階級別自殺者数の年次推移」によると、2009（平成21）年まで年間3万人を超えていた自殺者数は翌10（同22）年が2万7858人と3万人を下回り、その後年々減少し、17（同29）年は2万1321人となった。

世代別では30代から60歳以上は減少しているものの、19歳以下は17年が前年より47人多い567人、20代は2213人で前年より22人とわずかに減っただけで、若い世代の自殺者数は増加または微減という結果が出ている。

東京自殺防止センターでは若い世代の悩みに対応するため、2年前からフェイスブック社とツイッター社の自殺防止・予防のパートナー団体となった。フェイスブックやツイッターで「死にたい」「自殺」とつぶやくと、センターの問い合わせ先バナーが表示される。フェイスブックやツイッターといったSNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）を利用する若い世代向けの対応策だ。

「スマホ利用度が高い若い人たちがそれを見て、センターに電話してくると思われる。SNSでセンターの露出度が高くなってきた」（美濃部氏）という。

またセンターの相談員、村明子氏は「今の若い人たちは電話で直接話すという習慣がないから、電話での相談窓口があることすら知らないんです」と、若い世代の現状を憂いた。

実際にセンターに電話をかけてくる10代の子どもたちは、深刻なケースが多いという。たとえば家出を考え電話してきた女の子は「自分はどうなってもいい、死んでもいい」と自暴自棄の状態で、自分の死すら他人事のように語ったという。

村氏は「若い人たちが自殺に至る原因を『いじめ』と一口で言う人がいるが、そうではない」という。「いじめ」そして死を考えるに至るまでは、さまざまな要点、長年にわたる出来事の積み重ねがある。

「今の子どもたちは『親に心配をかけてはいけない』と考え『死にたい』と言ったら怒られることがわかっています。そのため小さい頃から、悩みを表に出さない、誰にも話さないというテクニックを持つようになる。それが積み重なって、どうしようもなくなり、『死にたい』と真剣に考えてしまう。センターに電話してくる時は、かなり深刻な状態です」（村氏）

「気にしています」とサインを出し続ける

こうした子どもたち、若い世代にどう向き合っていけばよいのか―。

村氏は「対応する大人が、まず相談してもよい人であるとの信頼を得ること。何気ない言葉でいいから声をかけ、『私はあなたを気にしています』とのサインを出し続けること」という。

また、自殺や「死にたい」ということをネガティブ（否定的）なものと頭から決めつけないことも大切で、「本人にとっては『死にたい』『自殺』ということが、唯一苦しみから逃れられるかもしれない手段なんです。それを大人が『よくないこと』と言うことは、その本人を否定することになり、逆に苦しめることになります」と語った。

ある統計によると、20代女性の37％、4割近くが「自殺を考えたことがある」という。「20代の女性にとって、自殺は身近なものです」と村氏。

ツイッターやフェイスブックといったSNSは、東京自殺防止センターにとって、若い世代へアプローチする重要な新たなツールとなっていることを、美濃部・村氏とも指摘し、宗教者にもその活用を薦める。

また、新たな社会問題として、子どもの「引きこもり」が長期化し、80代の親と50代の就労経験がない子どもが次第に生活に困窮する「80・50問題」も指摘されている。

同問題もこれから宗教界で取り組まざるを得ない課題になってくる。

平和、安全を守る思い新たに

東京都慰霊協会・秋季慰霊大法要

秋篠宮同妃両殿下が臨席のもと、慰霊・追悼を行った

東京都慰霊協会（檜垣正巳会長）は関東大震災から95年にあたる9月1日午前10時から、墨田区の東京都慰霊堂で「関東大震災並びに都内戦災遭難者秋季慰霊大法要」を、秋篠宮殿下、同妃殿下臨席のもと執り行い、震災並びに東京大空襲の遭難者を慰霊・追悼し、平和で安全な生活を守っていく思いを新たにした。

大法要は参列者で満堂となった慰霊堂に、秋篠宮同妃両殿下が臨席し開会。檜垣正巳会長の開式の辞に続き、日蓮宗大本山池上本門寺の菅野日彰貫首を大導師に、東京都仏教連合会の各地区代表の僧侶が参列し読経を行った。

「追悼の辞」を長谷川明東京都副都知事、長橋桂一東京都議会副議長、山本亨墨田区長、瀧澤良仁墨田区議会議長が述べた。長谷川副都知事は、小池百合子都知事の「追悼の辞」を代読。その中で、東日本大震災と「平成28年熊本地震」、大阪府北部地震、「平成30年7月豪雨」（西日本豪雨）と相次ぐ自然災害を挙げ、「あらためて都が取り組む防災事業の総点検を実施し、各事業のスピードアップとグレードアップを図ることにより、東京の防災に万全を期してまいりたい」と述べた。

各氏の「追悼の辞」では、95年前の関東大震災と73年前の東京大空襲の体験を次世代に語り継ぎ、平和で安全な生活を守っていくことの大切さが語られた。

この後、焼香を秋篠宮同妃両殿下はじめ遺族代表、来賓、協賛団体代表らが行った。宗教界からは全日本仏教会と東京都宗教連盟、東京都仏教連合会の代表らが焼香した。

法話を、大導師を務めた菅野貫首が行った。今年81歳の菅野貫首は終戦の年（1945年）の8月、生まれ育った礼文島に樺太からの避難民が毎日のように小舟でたどり着いていた記憶を語った。また、慰霊大法要に寄せられた千羽鶴に触れ、「鶴を折られた方々お一人おひとりの思いはいかがなものだったか。戦争、災害を風化させてはなりません」と述べ、相次ぐ自然災害を「他人事と思わず、我が身にあてて考え、防災に取り組むべきです」と説いた。

この後、東京都慰霊協会の住吉泰男副理事長が閉式の辞を述べ、一般参拝者の焼香が続いた。

当日午前には慰霊堂敷地内の「関東大震災朝鮮人犠牲者追悼碑」の前で、日朝協会東京都連合会などの主催により、朝鮮人犠牲者追悼式が執り行われた。

第38回千鳥ヶ淵全戦没者追悼法要

平和に寄与する活動を

―浄土真宗本願寺派―

浄土真宗本願寺派（西本願寺、大谷光淳門主・石上智康総長）は9月18日午後零時45分から、東京・九段の国立・千鳥ケ淵戦没者墓苑で「第38回千鳥ケ淵全戦没者追悼法要」を厳修した。同法要は悲惨な戦争を再び繰り返してはならないとの平和への決意を確認するため、1981（昭和56）年から毎年9月18日に千鳥ケ淵墓苑で宗門法要として営んできたもの。

当日は秋晴れに恵まれ、大谷光淳門主はじめ、来賓と僧侶、門信徒が墓苑に参集。はじめに宗門関係学校生徒の平和に関する作文朗読と表彰式が行われた。宗門では法要の趣旨である平和について考えてもらおうと宗門関係学校から毎年、作文を募集。今回は最優秀2作品、優秀6作品が選ばれた。

法要では、最優秀作文の秋元優佳里さん（武蔵野女子中学校3年）と、大岡光咲さん（相愛高等学校3年）がそれぞれ「命ということ」「世界を〝無視〟しないために」の題名の作文を朗読、石上智康総長から表彰状が授与された。

この後、仏教讃歌の斉唱と献花が行われ、六角堂前に備えられた「平和の鐘」が撞かれた。僧侶らが出仕し、着座。石上総長が六角堂前に立ち、「平和宣言」を読み上げた。

石上総長は「平和宣言」で「自他共に心豊かな社会」を訴えた

宣言では、先の悲惨な戦争の歴史を経験したにも関わらず、世界に今なお武力紛争やテロが絶えないことを憂い、「今こそ未来を担う私たちは、非道な戦禍の教訓を生かさなければなりません」と非戦への決意を表している。

また宗門が目指すべき「自他共に心豊かな社会」とは、さとりの真実に導かれ、国境や地域、思想・信条の異なりを超えた、互いの心が響き合う争いのない世界であるとした。そして「共に心豊かに生きていこうという願いを世界に発信し、それがたとえ小さな一歩であろうとも、実践し続けていかなければなりません」と訴える。

さらに戦後70年にあたる2015（平成27）年を契機として宗門が行った「平和に関する論点整理」から、「非戦平和を呼びかけるだけではなく、実際に平和に寄与する活動が不可欠」と再認識したことに触れ、具体的な取り組みとして「貧困の克服」に向け、宗門挙げてできることから取り組む決意を披歴した。

この後、築地本願寺の安永雄玄宗務長の調声（導師）により読経が勤められ、仏教讃歌を斉唱。来賓と宗門役員、参列者の焼香が続き、それぞれ平和への誓いと願いを新たにした。

インターネット上の差別テーマに

第49回部落解放・人権夏期講座

部落解放・人権夏期講座実行委員会は8月22から24日まで、和歌山県伊都郡高野町の高野山大学で「第49回部落解放・人権夏期講座」を開催した。同実行委員会は、部落解放・人権研究所（奥田均所長）が中心となり組織している。

1日目は、松下講堂黎明館と高野山大学体育館に分かれて開催された。黎明館で行われた全体講演①は午後2時15分から、ジャーナリストの津田大介氏が「インターネット上の差別問題の現状と解消に向けた取り組み」をテーマに講演。2016年に「ポスト・トゥルース」（Post‐truth 客観的な事実や真実が重視されない時代）という言葉が話題になり、イギリスのEU離脱における国民投票やアメリカの大統領選にこのような事態が大きく反映されたという。

この言葉は、客観的事実よりも個人の感情に訴えかけるものの方が世論形成に大きく影響する状況を示す言葉で、ネットでうそや曖昧な事柄が繰り返し言及されることで、「事実ではないもう一つの事実を作り出している」と指摘した。

また、情報技術が発達したことで、情報の一部を恣意的に切り取り、歴史や経緯、原因を切り取った上で、別の文脈を与えて配信することが出来てしまう。歪めた情報を流すことで、意図的に「炎上」させてアクセスを稼ぎ、広告で稼ぐビジネスモデルも出来上がっているという。

津田氏はヘイト（Hate＝憎しみ）被害をなくすために、プラットホーム（基盤となるソフトウェアやサービス）事業者に対策を求めること、差別煽動を繰り返すサイトへの企業の広告を止めさせること、配信者情報開示請求の方法を改善することなどを挙げた。

この後、大阪国際大学准教授の谷口真由美氏は「世界人権宣言70年と日本国憲法」をテーマに講演し、それぞれの人権規定の中身を解説した。

同時刻、高野山大学体育館では全体講演②として、NPO人権センターの片岡遼平氏が「部落差別の現実は、今」をテーマに、続いて熊本学園大学教員の矢野治世美氏が「高野山と被差別民―『金剛峯寺日並記』の世界」のテーマで講演した。

2日目は午前9時から、課題別に3会場に分かれ、ヘイトデモやハラスメント問題、障害者差別、バリアフリー、自死問題など12のテーマで講義が行われた。

3日目は午前9時から、「部落差別解消推進法と同和教育の課題」をテーマに、全国人権教育研究協議会代表理事の粂原成壽氏が学校教育において同法律を活かしていくための課題を考える講演を行った。また、漫画『はだしのゲン』の作者・中沢啓治さんが広島市内の思い出の土地を辿りながら、自身の生い立ちや、広島での被爆体験から同漫画を描くまでの半生を語ったドキュメンタリー映画「はだしのゲンが見たヒロシマ」が上映された。

新刊紹介

AI原論
神の支配と人間の自由
西垣　通　著

AI（人工知能）は期待と恐怖を孕（はら）む。いつかAIが発展し、世界の真理を明らかにしてくれる日がくるとの期待。そして、「ロボット」の語源となったカレル・チャペックの戯曲に現れるような、AIによる人間の支配という恐怖。どちらにせよ、いつかAIは人間を超える（「シンギュラリティ仮説」）と信じられている点では変わりない。

講談社選書メチエ
AI原論
神の支配と人間の自由
西垣通
1950年代、80年代、そしてシンギュラリティへ――この第三の波は本物なのか？第一人者がついに放つ警告の書！

しかし、著者はこのような考え方は現代的な「神話」に過ぎないと指摘する。

一部の脳科学者は、人間の心は脳の生化学反応に過ぎないと述べ、完全な脳のコピーを作れば、そこに心を再現することは可能だと言う。それに対して著者は、そもそも心は主観的に感じられるものであり、脳という客観的な物質だけで説明、再現できるものではないと指摘する。そのようなAIの限界を、著者は科学的な知見とともに、哲学的知見を用いて論証していく。

著者は情報学・メディア論を専門とし、コンピュータ・システムの研究開発にも携わった、いわゆる理系のスペシャリストである。

その著者が文系、特に哲学の議論を援用してAIについて論じている点が興味深い。これは、私たち人間が世界をどのように認識し、経験しているのか、真理・世界・人間とは何か―という哲学的な問いが、AIを考える際には避けて通れない道となっていることを示している。

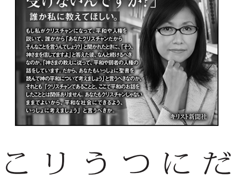
しかも、「AIが人間を超える」という考え方の背景には、一神教（ユダヤ―キリスト教）的伝統があると指摘し、宗教とAIの関係性についても言及し、AIが信仰的に崇められている状況についても警鐘を鳴らす。

理系・文系という枠組みを超えて書かれた本書は、平易な説明に努められているとはいえ、専門用語が多く、慣れない人にとっては難しく感じられるかもしれない。しかし、AIに何ができて、何ができないかを示唆する本書は、読経するロボット（ロボ導師）が話題になるなど、AIと関わらざるをえない現代の宗教界においても、読む価値のある一冊となるだろう。（講談社選書メチエ　四六判　208頁　定価1620円）

迷える社会と迷えるわたし
精神科医が考える平和、人権、キリスト教
香山　リカ　著

著者は、多くのメディアで政治や社会問題にも発言する論客として注目されている精神科医。自身は長くキリスト教会に通いながらも、キリスト教信者となる「洗礼」を受けていない「万年求道者」という。

本書は、キリスト教について考え続けている著者が、精神科医の観点から、キリスト教（教会）に求めているものとは、また平和や人権、心の救いなどについて、自身の悩みも素直に披歴しながら、さまざまな視点から考察する内容。二つの講演録とキリスト教カウンセリングセンター理事長の賀来周一氏との対談で構成されている。



迷える社会と迷えるわたし
精神科医が考える平和、人権、キリスト教
香山リカ
Rika Kayama
「香山さん、まだ洗礼を受けないんですか?」
誰か私に教えてほしい。
キリスト新聞社

精神科医の立場からは、「生きるのがしんどい」という学生や「病人未満」の企業人、「悲しみ」を忌避する現代、マインドフルネス療法の功罪など、現代人が抱える精神、心の悩みなど「迷える社会」の分析がわかりやすく説かれる。

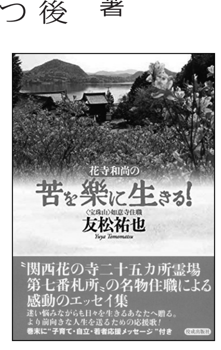
また「迷えるわたし」については、次のように記している。クリスチャンになって平和や人権を説き、誰かから「クリスチャンだから、そんなことを言うんでしょう?」と聞かれた時、「そう、神様を信じていますよ」と答えた後、「神様の教えに従って、平和や弱者の人権の話をしています。だから、あなたもいっしょに聖書を読んで神の平和について考えましょう」と言うべきなのか、それとも「クリスチャンであることと、ここで平和のお話をしたことは関係ありません。あなたもクリスチャンじゃないままでよいから、平和な社会にできるよう、いっしょに考えましょう」と言うべきか―。

これに似た問いかけは、著者のみならず、宗教者であれば体験したことがあるのではないか。一般の人々に平和や人権の話をする時、そこに宗教が介在すると、著者が指摘する「空気のカーテン」ができ、そこで話が途切れてしまう。それをいかに超えていくのか。

著者は現代の教会の在り方、癒しや信仰への素朴な疑問・批判から、キリスト教（教会）への期待や要望、宗教の役割などでヒントやアイデアを提示するが、そこには現代の宗教界、宗教者にとっても参考となる問題提起が含まれている。（キリスト新聞社　四六判　173頁　定価1728円）

花寺和尚の苦を樂に生きる！
友松　祐也　著

本書は、京都府北部丹後半島の風光明媚な地に建つ古刹・如意寺住職の法話集。約20年の教員生活を経て、住職を継いだ著者はご当地久美浜町の名士でもあり、よき悩み事カウンセラーでもある。教員時代に寄せられた生徒の精神的葛藤へのアドバイスや信者からの老いや病へのさまざまな相談事、それらに高僧名僧の思想や内外の文学等から学んだ名言などを交えてやさしく説いていく。



花寺和尚の
苦を樂に生きる！
〈宝珠山〉如意寺住職
友松祐也
Yuya Tomomatsu
〝関西花の寺二十五カ所霊場第七番札所〟の名物住職による感動のエッセイ集
迷い悩みながらも日々を生きるあなたへ贈る。より前向きな人生を送るための応援歌！
巻末に〝子育て・自立・若者応援メッセージ〟付き
佼成出版社

寺には悩み事相談に訪れる人も多い。著者はいう。「トラブルを解決するには、ものごとの道理を見つけなければなりません。自分の立場にこだわると、道理がみえなくなります。正しい見方をすれば問題の糸はほぐれます」「問題は、正しい道理を人間自身が受け入れられるかどうかであり、そのとき、私どもの『自我』が照射されます」と。

本書の構成は、第1章が出会った感動的な素敵な人たちの話。第2章は仏教の基本的な考え方、第3章は「仏教の大原則」について。そして第4章では「子育て・自立」などで奮闘している若い父や母、先生、これから子育てを始める人への「応援メッセージ」となっている。特に人生のスタートを見据える若い人には読んでもらいたいという。加えて自らの子育てに関する具体的なエピソードなども紹介され、思わず頷き、気付くところがある。（佼成出版社　B6判　268頁　定価1620円）